

Perfect and Imperfect Meanings of *-teiru* Forms in Japanese

SATO Hiromi

Abstract

The aspectual form *-tei (ru)* in Japanese is associated with a variety of meanings, that is, progressive, durative, result-state, and perfect. This paper argues that all these meanings are attributed to the feature [IMPERFECT] or [PAST] of the functional head, Asp, which determines the temporal relation between Topic Time (TT) and Situation Time (SitT). Asp_[IMPERFECT] results in different meanings depending on the lexical aspectual properties of the predicate, and the perfective meaning of *tei- (ru)* can only be derived when Asp_[PAST] is in agreement with a temporal adverbial in [Spec, AspP], which allows the Situation Time of the sentence to be anchored to a certain point in time in the past.

Key words : 「テイル」、アスペクト、パーフェクト、未完了

「テイル」の意味と構造

——時を関係づける述語としてのアスペクト

佐 藤 裕 美

A word is dead
When it is said,
Some say.
I say it just
Begins to live
That day.

Emily Dickinson

0. はじめに

ことばを発する行為は現実の時の中にあるが、発せられることばは、言語として時を刻む仕組みの中で、現実の時の支配を超えることができる。時に関する言語の仕組みの主なものとして、時制とアスペクトが挙げられる。アスペクトは、ある事象が時間の中でどのように展開するかを捉える概念であり、文において事象の全体の展開が表されるのか、あるいは事象の一部にのみ焦点が当てられているかのような違いを捉える。時制は文が表す事象の時が発話時を基準にそれ以前（過去）であるのか、発話時を含む時間であるのか（現在）、あるいはそれに続く時間（未来）であるのかのように、時の順序関係を表すものであるのに対し、アスペクトはある時間の中で事象が時の推移とともにどのように展開するかを表す。本稿は、日

本語のアスペクト型式「テイル」の考察を通して、時と時の関係を規定する述語としてのアスペクトの構造と意味についての研究である。

日本語のアスペクト形式「テイル」¹⁾ (テイ+ル_{現在時制形態素}) は、発話時に継続中の未完了の事態を表す以外にも、発話時以前に完了した事態を表すなど、複数の意味を表すことができる。単一の形式で完了と未完了両方の意味を表す「テイル」は、Aspect と構造との関わり、時の副詞表現と Aspect との関わりについて興味深い示唆を与える。Zagona (1990), Stowell (1993, 1995) では時制は文で言及される時を項としその相対的順序を規定する述語であると主張されるが、本稿では、アスペクトは時制と同様に、文中で言及される時を項とする述語として統語構造に反映されるとする Demirdache and Uribe-Exebarria (1997, 2000, 2004) の提案を踏まえ、「テイ (ル)」として実現するアスペクトには、Asp_[IMPERFECT] と Asp_[PAST] の2つがあり、未完了と完了の両方の意味が表されることを主張する。Asp_[IMPERFECT]、Asp_[PAST] のそれぞれが全ての状況タイプの非状態動詞を補部とすることが可能だが、述語の状況タイプによる構造の違い、素性照合の有無により「テイル」形の解釈が制約されることを示す。

以下では次の順序で議論を進める。§1 では文中で言及される時の関係についての述語としての Aspect の機能を「テイル」との関わりで概観する。§2 では「テイル」形の様々な意味を述語が表す状況タイプの観点から考察し、それを踏まえ、「テイル」形の未完了、完了の意味がどのように派生されるかについて §3、4 で議論する。

1) 「テイル」は非過去の時制形態素「ル」を含む形式であり、過去時制の場合は「テイタ」の形式になる。本稿では「テイル」と「テイタ」については時制の違いを認めるのみで、議論の対象となっているアスペクトとの関わりについては、特段の説明がない場合、影響がないと考える。

1. 時の述語としての Aspect

「テイル」形式²⁾の意味について、(1)に表すような違いを認識することができる。

- (1) a. ケンはパスタを茹でている。〈進行〉
- b. ケンは大学卒業以来、20年間その会社で働いている。〈継続〉
- c. 学校の門が閉まっている。〈結果状態〉
- d. ケンは5年前、フルマラソンを初めて完走している。〈経験〉

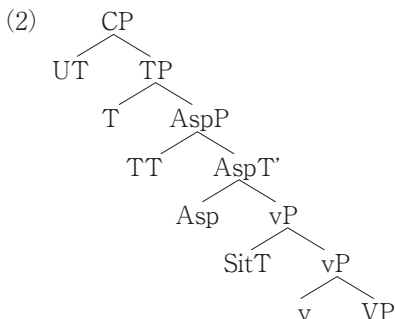
(1a) (1b) では、「テイル」形は事態が発話時に展開中であり未完了の状況を表すのに対し、(1c) では、出来事が終了し、その結果の状態が発話時に至るまで維持されていることが表されている。(1d) は、過去の出来事を表している。このように「テイル」は未完了、完了の両方の意味を表すが、単一の文法形式とこれらの異なる意味が関係づけられるためには、「テイル」の意味と文中で言及される時と構造との関わりについて検討する必要がある。

はじめに、文中で言及される時と時の関係を規定する述語としての Tense、Aspect が文中でどのように機能しているかを概観する。Klein (1994) の用語を用いると、UT (Utterance Time 発話時)、TT (Topic Time 言及時)、SitT (Situation Time 事態時) の3つの時が文の解釈に

2) 口語においては「イ」が脱落した以下のような表現が多用される。

- (i) ケンはパスタを茹でてる／茹でてた。
- (ii) ケンは大学卒業以来20年間この会社で働いてる／働いてた。
- (iii) 学校の門が閉まってる／閉まったた。
- (iv) ケンは5年前フルマラソンを始めて完走してる／完走してた。

関わるが、Reichenbach (1947)、Comrie (1976)、Hornstein (1990) に従い、これら3つの時の関係は2つの時の関係の組み合わせからなり、Tense (T) は UT と TT の関係を、Asp は TT と SitT の関係を規定することにより文の時の解釈が決定すると考える。



Present《現在》と Past《過去》の時制の違いは、UT が TT に含まれる（同時である）か、TT が UT に先行するかの違いとなり、単純時制の場合は、TT と SitT は同時となり、《現在》《過去》は以下のような関係として表される。コンマ (,) は共時性を、 $X > Y$ は X が Y に先行することを表している。

(3) 《(単純) 現在》 SitT, TT, UT

《(単純) 過去》 SitT, TT > UT

Asp により、事態が起こる時 (SitT) が、発話が焦点を当てている／言及している時 (TT) よりも前に順序づけられると完了／パーフェクト (Perfect) の意味として解釈され、英語の現在完了、過去完了はそれぞれ以下のように表される。

- (4) 《現在》〈完了〉 SitT>TT, UT
 《過去》〈完了〉 SitT>TT>UT

(4) では Asp は SitT が TT に先行する完了の意味のみを仮定しているため、「テイル」の〈進行〉、〈継続〉の意味を捉えることはできない。英語ではパーフェクトと進行形のそれぞれが形態的に出現することが可能であるが、上記(1)で見たように日本語では「テイル」のみによってその両方の意味を表すことができる。(2)の構造における Asp と「テイル」の複数の意味との関係について以下で議論する。

2. 動詞句の状況タイプと「テイ（ル）」形式の意味

全ての動詞が「テイル」によって(1a-d)が示す全ての意味を表すことが可能なわけではない。「テイ（ル）」形が表す意味は、述語の意味による語彙アスペクト(aktionsart)あるいは、Situation Type (cf. Smith 1997)によって異なることは金田一(1976)をはじめ多くで指摘されている。ここでは、(5)に示すように、述語の状況タイプを[±process][±definite]の素性によって分類する。(cf. Galton (1984)、Hoeksema (1984)、Verkuyl (1993))

(5)	− process	+ process
− definite	states (状態)	activities (動作)
+ definite	achievements (到達)	accomplishments (達成)

上に示した4つの状況タイプのうち、状態動詞の「テイル」形はいずれの意味においても非文となる。

(6) *ここに車のキーが~~あ~~っている。

状態動詞は、動的なプロセスを欠き、事態が終結する限界点をもたない [-process, -definite] の状況を表す。下で詳述するように、「テイル」のそれぞれの意味は、事態の [+process] の部分について、あるいは、[+definite] の限界点に関わるため、これらの性質の対極にある状態動詞の「テイル」は排除されると考えられる³⁾。

動詞句の状況タイプによって異なる「テイル」形の意味は、しばしば(7)に示すように分類される。

- (7) 〈進行〉 $V_{\text{動作}} + \text{テイル}$ 、 $V_{\text{達成}} + \text{テイル}$
 〈継続〉 $V_{\text{動作}} + \text{テイル}$ 、 $V_{\text{達成}} + \text{テイル}$
 〈結果状態〉 $V_{\text{到達}} + \text{テイル}$
 〈経験〉 $V_{\text{動作}} + \text{テイル}$ 、 $V_{\text{達成}} + \text{テイル}$ 、 $V_{\text{到達}} + \text{テイル}$

〈経験〉は「テイル」形が可能な非状態を表す全ての状況タイプに対して可能な意味である。(7)に示される分類では、〈進行〉〈継続〉は双方とも動作と達成の状況タイプに対して可能であるのに対し、〈結果状態〉はこれらの状況タイプに対しては可能ではなく、到達のタイプにのみ可能である。これらの異なる意味について、述語の状況タイプとの関わりに帰する部分と「テイル」のもつ意味に帰する部分を分けて考察する必要がある。

3) 「そびえる」「優れる」など、「テイル」を伴った形のみが通常用いられる動詞がある。

(i) a. 富士山が西の方角にそびえている。

b. 田中君は反射神経が優れている。

また、「違う」と「違っている」のようにどちらの形式も可能な動詞もある。

(ii) a. あなたの答えは違います。

b. あなたの答えは違っています。

(iia) (iib) の間に感じられる違いは、「テイル」形によって一時的な状況が表される可能性によることを指摘する。

(8) の例は、文脈から自由な場合、複数の解釈が可能になるが、文中の述語や副詞的要素の解釈は「テイル」形の意味と相関して一定ではない。

- (8) a. 風で崖が崩れている。〈進行〉〈結果状態〉〈経験〉
- b. 田中さんは大学でスペイン語を学んでいる。〈進行〉〈経験〉
- c. 田中さんは大学で3年間スペイン語を学んでいる。〈継続〉〈経験〉

(a) では、「崖が崩れる」が表す状況タイプを到達と捉えると、文が表しているのは崩れた結果の状態で、〈結果状態〉の解釈となる。一方、プロセスを含む達成の状況タイプと解釈されれば、発話時における〈進行〉、あるいは、例えば過去の台風に言及していると解釈する場合、〈経験〉を表していると解釈できる。(b) には、田中さんが発話時に大学に在学中でスペイン語を学ぶという行為が進行中である解釈と、スペイン語の学習が過去に起こったことであるという解釈の2通りが可能である。後者の場合、「大学で」は発話時において行為が起こっている場所ではなく、大学時代の意味で過去の時を表す解釈がされる。(c) は田中さんが3年前から発話時にいたるまでスペイン語の学習を継続しているという解釈と、3年間スペイン語の学習という継続的な行為を経験したという解釈の2つの可能性がある。このように「テイル」は、述語や他の要素との関わりによって異なる意味に解釈されるが、これらの異なる解釈の中で、時に焦点を当てて考えると、発話時（または言及時）を含む時間の事態について表しているか、あるいは、それより過去に起こった事態を表しているかの違いは顕著であろう。これはいわゆる未完了と完了（パーフェクト）の違いであるが、以下の議論では、「テイル」形の意味をこの2つに大きく分け、さらに細かな意味の違いについて、文中で言及される時を項とする述語であるアスペクトとして「テイル」が具体的にどのように機能し、文中の他の

要素と関係するかについての説明を試みる。

3. 未完了を表す「テイル」形

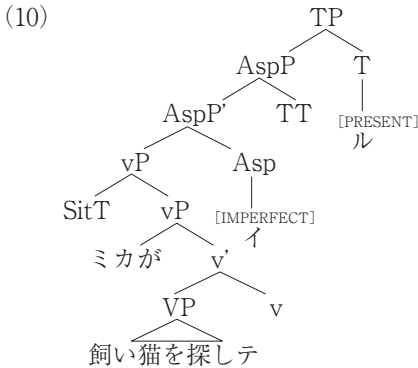
3.1 〈進行〉／〈継続〉

「テイ（ル）」の意味の考察のため、まずは「テイル」形と単純現在時制の意味を比較する。

- (9) a. ミカは飼い猫を探している。
b. ミカは飼い猫を探す。

「テイル」を含む (9a) は、発話時にミカが飼い猫を探す状況が進行中であることを述べているのに対し、単純な現在形を用いた (9b) は、発話時に進行中の事態についての描写ではなく、ミカの習慣的な行動、あるいは未来の予定・予測を述べている。これは、日本語では、非状態動詞 (eventive verb) は現在時制で進行（未完了）の意味を表すことができないためである。英語でも非状態動詞が現在時制で未完了を表すことができないが、これは言語一般に共通する現象ではなく、英語以外のゲルマン語、イタリア語などのロマンス語では現在時制で未完了を表す言語が多くある。Giorgi and Pianesi (1997) ではイタリア語、ドイツ語などと対照的な英語のこの性質についての説明として、英語の非状態動詞は、時間的な限界とそこに至る過程を含む閉じた事態 (closed event) を表し、[+perf] の素性をもつとしている。このような閉じた事態は時間軸上の瞬時の点である発話時と同時に起こることができないため、英語では [+perf] である非状態動詞が現在時制で発話時における未完了の事態を表すことはできないことになる。日本語の非状態動詞が単純現在形で発話時における未完了を

表すことができないことについても、英語の場合と同様の考え方をとることができる。日本語においても、非状態動詞は事象を閉じたものとして捉え、完了の意味素性をもつと仮定する。これに従うと、「テイル」形では、非状態動詞の [+perf] から未完了 (imperfect) への変化がもたらされていると考えることができる。より具体的には、次の樹形図にあるように、「テイル」が〈進行〉を表す場合、AspP の主要部には [IMPERFECT] の素性をもつアスペクト形態素の「(テ) イ」がある。



AspP の主要部の [IMPERFECT] により、vP の SitT は閉じた事態ではなく、未完了の事態として理解される。Uribe-Exebarria (1997, 2000, 2004) による進行形の分析に従い、 $[_{Asp}IMPERFECT]$ の意味を WITHIN とすると、(10) で飼い猫を探す SitT はその展開のうちに TT を含み、さらに現在時制 $[_TPRESENT]$ により、TT は UT と同時となり、意図する解釈を得ることができる。

(11) では発話時において事態が進行中（未完了）であることのみが表されているのが、発話時 (UT) に進行中の歯を磨く／猫と遊ぶ行為は発話時に開始したのではなく、それ以前の過去のある時に開始されているこ

とが前提にある。(12) では、発話時において進行中の事態の開始が過去の時点にあることが明示的、あるいは、発話時に至るまでの継続期間が明示的である。

- (11) a. ケンは歯を磨いている。
 b. ミカは行方不明の猫を探している。
- (12) a. ケンはもう 20 分も歯を磨いている。
 b. ミカは半年前から行方不明の猫を探している。

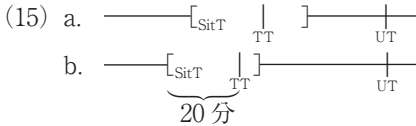
(11a) と (12a) ではいずれも発話時に歯を磨いている状況にある点では等しく、違いは、歯を磨く行為の開始時間、継続時間が明示されるか否かのみにある。したがって、どちらの場合においても、「テイル」による意味は共通して〈継続〉であると考えることができる。事態の開始時点や継続期間を表す副詞句や文脈による顕在化により、発話時に進行中の事態の開始点が明示的になるが、このような副詞句が共起しない場合、発話時に至るまでの事態の展開については言及されず、発話時（と同時の TT）にのみ言及することになる。

(11)、(12) で表される時間項の関係はそれぞれ (13a)、(13b) のように表される。

- (13) a. ——— [_{SitT} |] —
 UT, TT
- b. ——— [_{SitT} |] —
 UT, TT
 20 分前／半年前

「テイタ」を含む (14) では、過去の形態素「タ」により、現在時制の場合と同様、TT が SitT に含まれるが、TT が UT に先行する点が異なる。

- (14) a. 電話が鳴った時、ケンは歯を磨いていた。
 b. 電話が鳴った時、ケンはまだ 20 分も歯を磨いていた。



過去時制では、TT が UT に先行するが、「テイ（ル／タ）」が規定するのは TT が SitT に含まれることのみで、SitT と UT の関係は規定されていない。TT 以降の事態のあり方については曖昧であるため、SitT の終了時が UT 以降であることも可能である。(14.a)、(14b) では、電話が鳴った時が TT である事は共通し、継続時間を表す副詞句を含む (14.b) は、(15b) に示されるように、SitT の開始から TT までの時間が明示されている。

このように、前節では異なるものとして分類していた〈進行〉〈継続〉は、TT を含む時間に事態が継続中であることを表す「テイ（ル／タ）」の意味を表す点において共通していると言える。〈進行〉と〈継続〉は動作と達成の状況タイプが対象となる点でも共通している。本稿では、〈進行〉〈継続〉の意味は共に「テイ（ル／タ）」の WITHIN の意味に帰因し、両者を同じものとして捉え、以後、〈継続〉を統一的に用いる。

発話時における事態の継続と明示的な過去の時から発話時に至る継続が同じ形式によって表されることは他の言語にも見られる。すでにふれたように、イタリア語では到達動詞以外の動詞は現在形で未完了の意味を表すことができる。

- (16) Monica cerca la chiave.

Monica search_{3rd sg. pres} the key
 'Monica is looking for the key.'

このような動詞は、事態の継続期間や開始時を表す副詞表現を伴い、現在形で過去から続く未完了の事態を表すことができる。

(17) Monica cerca la chiave da 6 giorni.

Monica search_{3rd sg. pres} the key for 6 days
 'Monica has been looking for the key for 6 days.'

ここに示される日本語とイタリア語の違いは、イタリア語では単純現在形で未完了を表すことが可能だが、日本語では非状態動詞は現在形は未完了を表すことができず、「テイル」形によって未完了が表されることである。その違いはあるが、両言語において、発話時における未完了と過去から発話時に至るまで継続する未完了が同じ形式によって表され、区別されない点で共通している。

3.2 〈結果状態〉

次の例が示すように、到達動詞は「テイル」によって未完了を表わすことはできない。

(18) a. 電車が駅に到着している。

b. アキラは弟の異変に気づいている。

これらの例は、電車の到着や、気付いていなかったことに気付くという事態が発話時に進行中であるという未完了の意味では解釈できない。到達

動詞である「到着する」、「気付く」は、[-process, +definite] の素性による分類からも、状況が展開するプロセスを含まず、時間軸上のある一点で事態が終了限界に達することを意味する。Asp_[IMPERFECT] によって動作の〈継続〉を表すことができるのは、§2 で見たように、動作と達成の状況タイプに限られ、つまり、[+process] を含む状況タイプである。到達の状況アスペクトは瞬時に完了するものであり、(18a. b) が動作の〈継続〉の意味を表さないことは、「テイ (ル)」の WITHIN の意味によって、到達の状況アスペクトが示す瞬時のうちに解釈上有意な TT を含むことができないためであると考えることができる。

(18a. b) では、事態の継続ではなく、事態が完了した結果の状態が発話時にあることを表わしている。この意味は、金田一 (1976) では「結果」、寺村 (1984) では「結果の状態」、工藤 (1995) では「結果継続」などのように表わされ、「テイル」の他の意味とは区別されている。本稿ではこの意味を〈結果状態〉と表すが、以下では〈結果状態〉を表す場合の「テイ (ル)」も Asp_[IMPERFECT] の WITHIN の意味によるものであることを主張する。その前に、到達動詞の「テイル」形をアスペクト形式とは異なるものとして分析する妥当性について検討したい。

到達動詞の「テイル」形が他の非状態動詞の場合とは異なる意味をもつことから、この場合の「テイル」は Asp 形式ではなく、到達動詞による結果を表す二次的な述語 + 存在を表す動詞「イル」からなる可能性を検討する。まず、存在を表す動詞「イル」は生物に対して用いられ、無生物には用いられないことが指摘される。無生物の存在には「アル」が用いられる。

(19) a. タケルはアフリカに友達が 10 人いる。

b. * 道路に水たまりがいる。

c. 道路に水たまりがある。

(20) a. * タケルの家には最新の掃除機がいる。

b. タケルの家には最新の掃除機がある。

「テイル」形を含み〈結果状態〉を表している文では、(21) の例にあるようにその主体として無生物が排除されることはなく、「(テ) イル」は存在の「イル」と性質を異にすることがわかる。

(21) a. 道路の水たまりが乾いている。

b. 掃除機が故障している。

c. 椅子が倒れている。

また、「テイル」により〈結果状態〉を表す文が必ずしも「存在」について述べていないことを指摘する。「わかる」「知る」「忘れる」などの認知に関わる到達動詞の「テイル」形は認知の状態を表すが、動詞の項となるものの存在について言及するものではなく、また、「消えている」「無くなっている」のように不在の状態を表すこともある。

(22) a. 猫の居場所はわかっている。

b. 田中さんの住所を知っている人はいません。

c. ミカは彼氏の誕生日を忘れている。

d. ケンの部屋の明かりが消えている。

e. さっきまであったクッキーが無くなっている。

このように、到達動詞の「テイル」形が、アスペクト形態素ではなく存在の動詞「イル」を含む他の非状態動詞の「テイル」形とは異なるものと

しての分析は適切ではないことがわかる。以下の議論では、〈結果状態〉を表す「テイル」形も Asp_[IMPERFECT] によることを示す。

到達動詞が「テイル」を伴う場合、動詞が表す事態の発生は含意されているが、直接は表されていない。寺村（1984）では、次に挙げる例について、金魚が死ぬところを見ている必要はなく、死んでしまった後の様子を表すものとしている。

(23) 金魚が死んでいる。(寺村 *ibid.*: 135 (47))

(23) を発した話者は、「金魚が死ぬ」事態の完了を感知する必要はなく、それがいつ起こったかは問題ではない。「金魚が死ぬ」事態による結果として生じた状態を表しており、これは到達の状況タイプから状態への変化として捉えることもできる。つまり、到達動詞の「テイル」形は、プロセスや終了限界点を表さず、状態述語（[−process, −definite]）のように機能していると言える。そしてその状態の開始時は、到達動詞が表す出来事の終了限界と一致する。

(21)–(23) のような文では、状態が成立している時間の中に UT, TT が含まれ、表されている状態は終了の限界点がないので、未完了の事態である。到達動詞が表す事態の終了時点が結果状態の開始時となるが、その時点が必ずしも明示されていないのは、[+process] である動作動詞と達成動詞の「テイル」形が〈継続〉を意味する際、開始点が明示されない場合と共通しているとも言える。

(24) 田中君がグラウンドを走っている。

[+process] の動詞の場合は、そのプロセスについて [IMPERFECT]

により、事態が展開する時間 (SitT) に UT, TT が含まれることになる。
 [-process] である到達動詞の場合は、Asp の [IMPERFECT] によって、到達動詞による結果状態の時間が SitT として Asp の項となり、それが UT, TT と関連付けられると考えることができる。Asp_[IMPERFECT] は [+process] をもたない到達動詞の場合、[+definite] の性質により、その終了限界点を開始点とする SitT を項とし、[IMPERFECT] により UT, TT is WITHIN SitT の解釈となる。この考え方では、到達動詞と [+process] の動詞では「テイル」形が表わす意味が異なるが、双方ともに Asp の [IMPERFECT] によるとする説明が可能である。到達動詞が過去時制の「テイタ」を伴う場合、過去時制 [Past] によって TT が UT に先行する点は現在時制と異なるが、TT が [IMPERFECT] によって状態の SitT に含まれているという点において等しい解釈となる。

- (25) a. 出勤したらオフィスのエアコンが壊れていた。
 b. 今朝、花屋の店先ではもうコスモスが咲いていた。

〈継続〉と〈結果継続〉の違いは述語の状況タイプと相関することを見たが、これを構造との関係から考えてみる。到達動詞のほとんどは非対格動詞であり、動作主 (Agent) の主語を持たない。「見つける」「(金メダルを) 獲得する」などの対格をとる到達動詞もあるが、これらの動詞の主語は動作主とは解釈されない。このことは到達動詞とそれ以外の非状態動詞 (動作動詞、達成動詞) の上述の違いは vP の性質の違いとして捉えることを示唆し、構造上の違いとして次のように提案する。動作動詞、達成動詞は、(26a) にあるように v_{DO} により動作主の項が与えられ、さらに v_{DO} により vP は [+process] の素性をもつ。一方、到達動詞は v_{DO} とは共起せず、動作主と [+process] の素性も許可されない。ここでは、到

達動詞は (26b) のように vP を投射しない構造を仮定する。

- (26) a. [[[V_{動作/達成} VP] v_{DO} vP] Asp_[IMPERFECT] AspP]
 b. [[[V_{到達} VP] Asp_[IMPERFECT] AspP]

この構造の違いは、日本語の非対格と対格の動詞の形態的交替に反映される場合がある。日本語の非対格動詞と対格動詞の対に見られる形態音韻論的交替は、個々の語彙的特性、音韻的環境など様々な要因でいくつかのパターンがあるが、非対格動詞に [s] や [e] を挿入して対格動詞が派生されるものが多い⁴⁾。[s]、[e] が使役の意味をもち v_{DO} の具体化と見なすことができる。

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| (27) 非対格 ([−process]) | 対格 ([+process]) |
| oti-ru (落ちる) | oto-s-u (落とす) |
| yogore-ru (汚れる) | yogo-s-u (汚す) |
| kie-ru (消える) | ke-s-u (消す) |
| tat-u (立つ) | tat-e-ru (立てる) |
| sirizok-u (退く) | sirizok-e-ru (退ける) |

このように、〈結果状態〉も Asp_[IMPERFECT] による未完了として説明することができる。「テイル」は共起する述語の状況タイプにより、未完了の出来事を表す場合と、状態を表す場合があるが、このように、同じ文法形式によってプロセスを含む事態の未完了と状態が表される現象は、イタリ

4) (i) (ii) では、非対格動詞から [e] が削除され、対格動詞が派生されているように観察される。この [e] は v_{DO} によるものではなく、対格動詞を非対格化する形態素であると考えられる。

(i) yabure-ru (破れる) yabur-u (破る)

(ii) sake-ru (裂ける) sak-u (裂く)

ア語の直説法半過去 (indicative imperfect, (-av-, -ev-, -iv-)) にも見ることができる。イタリア語では現在時制が未完了を表すことはすでに見たが、直説法半過去は「過去における現在」とも称される通り、過去において不特定期間継続中の未完了の動作や状態を表す⁵⁾。(28) では未完了の動作が表され、(29) では未完了の状態が表されている。(29) との比較のため、(30) では同じく動詞 *conoscere* (to know) の近過去形により、過去の出来事が表されている。

(28) a. Mentre studiavo, i miei amici giocavano a carte.

while study_{imperf 1st sg} the my_{pl} friends play to card
'while I was studying my friends were playing cards.'

b. Quando tu arrivasti, chiudevo la porta per uscire di casa.

when you arrive-past close_{imperf 1st sg} the door to leave from the house
'When you arrived, I was closing the door to leave the house.'

(29) Lo conoscevo per galantuomo.

him know_{imperf 1st sg} for gentleman

5) 以下の (i) にあるように、不特定期間継続した状態は直接法半過去形で表されるのに対し、過去の特定の時点に起こったことは (ii-a) のように近過去 (present perfect) で表される。

(i) Quando ero giovane, abitavo a Roma.

when be_{imperf 1st sg} young live_{imperf 1st sg} to Rome
'When I was young, I lived/was living in Rome.'

(ii) a. La prima volta l'ho conosciuto a Tokyo.

the first time him-have_{1st sg} known at Tokyo
'I met him in Tokyo for the first time.'

b. Ho abitato a Roma dal 1990 al 1999.

have_{1st sg} lived in Rome from-the 1990 to-the 1999.
'I lived in Rome from 1990 to 1999.'

'I knew him as a gentleman.'

(30) L'ho conosciuto alla festa del mio amico.

him-have known at-the party of-the my friend

'I met him at my friend's party.'

上の例が示す通り、イタリア語の直説法半過去は英語の進行形 (*be -ing*) とは異なり、動的なプロセスの未完了と未完了の状態のいずれも表すことができる。(29)と(30)が示す通り、動詞 *conoscere* は出来事と状態のいずれをも表すことができ、(29)は、「知っている」のように「テイル」が到達動詞と共起し、〈結果状態〉を表す場合と同様の現象として捉えることができる。

最後に、到達動詞の「テイル」形が状態ではなく、複数の出来事の連続を表す場合があることを指摘する。

(31) a. 支援物資が被災地に次々と到着している。

b. 葉っぱが次々と落ちている。

c. 家が次々に完成している。

日本語では名詞の単数／複数について形態上義務的な区別はないが、上記の例では「次々と／に」により主語として表されている対象が複数でなければならず、そのそれぞれが対象となって完結する出来事が複数回起こることを意味している。これは到達だけに限った現象ではなく、「到達」と同じように終了限界のある状況、「達成」を表す述語にも起こる。

(32) a. ユミは論文を次々に書いている。

- b. ミドリはケーキを次々と焼いている。

これらの例においても「論文を書く」「ケーキを焼く」という出来事がそれぞれ複数あることになる。これらの文では、「次々と／に」によって、1つの事態が終了限界に達してもまた新たな事態が始まることが表されることから、「次々と／に」と一致する、出来事が繰り返されることを表す空の補助動詞 MULTIPLY が含まれると仮定する。到達の事態が複数起こる状況を表す $[_{VP} [_V \text{ MULTIPLY}] [_{VP} V]]$ 全体が表す時が SitT として Asp_[IMPERFECT] の項となり、TT が含まれることにより、複数の出来事の連続が継続中であることを意味する。到達動詞に関わる特別な意味としてではなく、Asp_[IMPERFECT] による他の未完了の場合と同じ説明が可能である。

4. 〈経験〉

「テイル」は過去の特定の時への言及や事態の終了限界を設定する句を伴い、動作の〈継続〉や〈結果継続〉ではない、過去の事態を基準時のパースペクティブから表す、〈経験〉を表す形式でもある。工藤（1989）、須藤（2010）では、過去の事態を表す「テイル」について「パーフェクト」の用語が用いられている。パーフェクト（完了形）の形式を持つ英語など他の言語においては、パーフェクトには Universal Perfect、Experiential Perfect、Resultative Perfect などいくつかの異なる意味が含まれ、「テイル」の〈継続〉や〈結果状態〉の意味と重なる部分もあるため、ここでは〈経験〉として表す。「テイル」形が未完了を表す場合、述語の状況タイプにより〈継続〉、〈結果状態〉の意味になることをすでに見たが、これとは異なり、「テイル」を伴うことができるすべての状況タイプの述語（非状

態述語)は「テイル」形で〈経験〉の意味を表すことができる。

- (33) a. ミカは先月出張先でトラブルになった時、すぐに上司に電話している。(電話する：動作)
 b. ケンは短編小説を15編書いている。(小説を書く：達成)
 c. 事件の日、ドバイからの便は定刻通り16時03分に成田に到着している。(到着する：到達)

(33)の文は、明示されている過去の特定の時に事態が起こったこと(a, c)、過去に終了限界に達したこと(b)を表しており、「ル」形により現在時制であっても過去の出来事に言及している。「テイル」により〈経験〉を表す場合、文中で過去の時に言及したり、終了限界を明示する副詞表現がある、あるいは事態が起こった過去の時が文脈により提示されることが必要である。このような副詞表現や文脈により過去の時への言及がない場合は、「テイル」を含む文は〈経験〉を意味することはなく、状況タイプにより〈継続〉、〈結果継続〉を表すとして解釈される。(34c)は飛行機が到着した状態が発話時にも維持されていることを意味するが、(33c)では、事件の日という過去の出来事として表わされ、両者は異なる意味として区別される。

- (34) a. ミカは上司に電話している。
 b. ケンは短編小説を書いている。
 c. ドバイからの飛行機は成田に到着している。

(33)のように〈経験〉表す文には、終了限界や過去の時に言及した副詞表現や文脈が必要ではあるが、次の例が示す通り、これらの副詞表現を

含んでいても単純な現在時制の動詞では、過去の事態を表すことはできない。

- (35) a. *ミカは先月出張先でトラブルになった時、すぐに電話する。
 b. *ケンはいままでに短編小説を 15 編書く。
 c. *事件の日、ドバイからの飛行機は定刻通り 16 時 3 分に成田に到着する。

したがって、(33) では、過去の時への言及には「テイル」が関与し、「テイル」により「先月」「事件の日」「16 時 03 分に」などの過去の時に言及する表現、「15 編」のような終了限界を示す表現が許可されると考えるべきであろう。これらの文にある「テイル」は、TT が SitT に含まれる解釈をもたらす Asp_[IMPERFECT] ではないため、これまでとは異なる説明が必要であり、また、「テイル」によって未完了と完了という相反する意味がどのように表されるかについての問題もある。

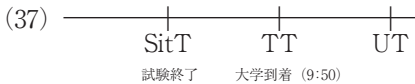
はじめに、現在時制の「テイル」に対応する過去時制の形式である「テイタ」が、過去のさらに過去の時を表す過去完了として用いられることから、「テイル」と過去の間隔を考察したい。次の例では、既に見た「テイタ」が過去のある時点における〈継続〉〈結果状態〉を表すのとは異なり、基準となる過去のある時点よりもさらに以前の過去の事態を表している。

- (36) a. あの日は 9:50 に大学に到着した。試験は終わっていた。
 b. …ただ、都へはいる前に、太刀だけはもう手放していました。
 一私の白状はこれだけです。…（芥川龍之介 藪の中 157）
 c. お芳が泊まってから一週間ほどの後、武夫はまた文太郎と喧嘩をした。喧嘩はただ豚の尻尾は牛の尻尾よりも太いとか細いと

か云うことから始まっていた。(芥川龍之介 玄鶴山房 277)

- d. 三四郎は帰京の当日此招待状を下宿の机の上に見た。時期はすでに過ぎていた。(三四郎 285)

(36a) における時間の関係は次のように図示される。



9:50 に大学に到着したのは過去の出来事であり、過去時制の「到着した」が用いられている。この大学に到着した過去の時間が TT として基準となり、それよりもさらに過去に起こった事態である試験の終了は「テイタ」によって表されている。つまり、「テイタ」の過去時制は TT が UT との関係において過去であることを表し、SitT が TT よりもさらに過去の時間であることはアスペクト形式の「(テ) イ」によって表されていると言える。(36a) の後半部分を「(テ) イ」を除いた過去時制のみの文にすると、試験の終了が大学の到着に先行する解釈はできない。

(37) あの日には 9:50 に大学に到着した。試験は終わった。

このように、「(テ) イ + タ_{Past}」が過去完了を表すことから、アスペクト形式の「(テ) イ」には SitT が TT よりも過去であることを表す意味があることがわかる。(33) のような過去の〈経験〉を表す文においても、現在時制によって UT と TT は共時的となるが、「(テ) イ」によって SitT が TT 先行し、結果的に SitT > TT, UT となり、発話時以前の過去の事態を表すと考えることができる。このように、SitT を TT に先行させ

る意味を持つ「(テ) イ」は、SitTとTTをWITHINで関係づけた Asp_[IMPERFECT]としての「(テ) イ」とは異なり、SitT is in the [PAST] of TTのように、[PAST]の意味をもって2つの時の関係を規定するアスペクトであると考えられる。

現在時制の(33)において「(テ) イ」がSitTをTTに先行させる[PAST]としての機能をもつことを示唆したが、時制要素ではないアスペクト要素が[PAST]の意味を持つことは、英語の完了形においても指摘されている。

- (38) a. He is rumored to have come last Tuesday. (Stowell 2007: (22c))
- b. He is believed to have already left when I met him. (Stowell ibid.: (27))
- c. He is rumored to have seen her [only once before] [when I met him]. (Stowell ibid.: (30))

(38)では主節の時制は全て現在であり、補文不定詞節では過去の出来事が完了不定詞によって表されている。また、Stowell (2007)では、次の例で完了のhaveによって時制の一致が引き起こされていることを指摘し、完了のhaveが[PAST]として機能していることを主張している。

- (39) a. John has often believed/thought/said that he was unhappy. (Stowell ibid.: (46a))
- b. John is believed/known/alleged to have claimed that he was unhappy. (Stowell ibid.: (47a))

英語では完了の have-en と未完了 be-ing が同一節内で用いられることが可能だが、日本語では [IMPERFECT] の「(テ) イ」と [PAST] の「(テ) イ」の両方が同一節内で現れることはない。次の例のような英語では現在完了進行形で表される状況は、日本語では [PAST] の「(テ) イ」を用いた場合、未完了の意味は「(テ) イ」以外の表現によって表される。

(40) John has already been working on the paper.

「(テ) イ」が表す〈経験〉の意味は、過去に完了した事態であり、同時に未完了の事態として提示されることは意味的な矛盾からも排除される。ともに「(テ) イ」によって表される [IMPERFECT] と [PAST] は、それぞれ、‘TT is WITHING SitT’ と ‘SitT precedes TT’ の意味で解釈され、両立しないことから、日本語では Asp では [IMPERFECT] / [PAST] の素性のいずれか一方が選択される。そのいずれが選択されても「(テ) イ」として実現する。

Asp_[PAST] は状態以外のすべての状況タイプの述語を補部にとることができる点では Asp_[IMPERFECT] と同様だが、Asp_[IMPERFECT] との違いとして、(33) で示されたように、過去に事態が起こった時間 (SitT) を表す表現や、終了限界を表す表現が必要であることが挙げられる。

- (41) a. ミカは芥川龍之介の小説をすべて読んでいる。
 b. ミカは先月、部屋の壁紙を張り替えている。
 c. サッカー日本代表が帰国した時、大勢のファンが空港で出迎えている。

(41a) は終了限界を表す「すべて」が含まれ、特定された目的語名詞句

によって終了限界が明示され、〈継続〉の解釈は不可で、芥川龍之介のすべての小説を読むことが過去の特定されない時に完了したことを意味している。(41b)は「先月」が表す期間のある時に壁紙を張り替えを行ったことを意味している。(41c)では、過去の時を表す副詞節によって「(テ)イ」により表される事態の SitT が明示されている。つまり、「(テ)イ」が〈経験〉を表す Asp_[PAST] は、事態が過去の出来事である、あるいは、過去に終結していることを示す明示的な句、あるいはそのような解釈を支える、文脈に顕在する非明示的要素が必要である。この要件は、Asp_[PAST] と [spec, AspP] との間の素性照合によって具体化されることを提案する。終了限界を表す目的語の DP や過去の特定の時を表す副詞表現は [+definite] の素性をもち、Asp_[PAST] と一致すると考えられる。[+definite] の素性を持った要素が(非明示的に) [spec, AspP] に移動し素性の一致がある場合のみ、Asp_[PAST] は許可される⁶⁾。Asp_[IMPERFECT] は [Spec, AspP] と特定の素性と一致関係にある必要はなく、素性照合はない。このように、アスペクト形式の「(テ)イ」が未完了と完了の相反す

6) 英語の完了の have が PAST として機能することを Stowell (2007) による完了不定詞の例 (cf. (38)) により確認した。Brugger (1998) では、主節が現在完了形の場合、〈経験〉(experiential perfect) を表すものとそれ以外の〈継続〉(universal perfect) と〈結果〉(resultative perfect) では、補文の時制解釈に違いがあることが指摘されている。完了形が〈継続〉(i) と〈結果〉(ii) を表す場合は、補文の過去形は主節によって表される時よりも過去の時間を指す解釈 (shifted reading) となるが、〈経験〉の意味が表される場合は、補文の過去形の動詞は、主節が表す過去の時のさらに過去の時を表す解釈 (shifted reading) に加え、主節で表される時と同時の解釈 (simultaneous reading) も可能である。

- (i) John has convinced his coach that he was too weak to play. (shifted)
- (ii) Since Friday John has been convincing his coach that he was too weak to play. (shifted)
- (iii) John has convinced his coach once before that he was too weak to play. (simultaneous, shifted)

これは、(i) (ii) の主節の時制が PRESENT であるため、補文の過去時制は主節よりも過去の時を表すことになるが、(iii) ではそれに加え、主節と補文に共時的な解釈が可能であるのは、時制の一致の影響によると考えられ、主節は時制の一致を引き起こす PAST を含むと考えられる。英語の現在完了には複雑な問題があるが、完了のアスペクト形態素 have が PAST と関係づけられる場合とそうでない場合についての考察は、日本語ではアスペクト要素の「(テ)イ」と [PAST] との関わりについても示唆を与えるものであり、今後の課題としたい。

る両方の意味を表すことについては、Asp のもつ素性とその照合に関する違いとして説明が可能である。

「(テ) イル」が〈経験〉を表す場合、現在時制であっても [past] が関わっていることを示す現象を1つあげたい。日本語では時制の一致がなく、主節が過去時制の場合、補文の現在時制の述語は主節が表す時と同時の解釈がされる。例えば、(42a) では、現在時制の補文の述語「不気味だ」は、主節の過去時制に相対し、主節の動詞「感じた」が表す時と同時の解釈となる。(42b) でも補文の述語は現在時制であるが、主節が現在時制であるため、発話時と同時の解釈となる。(43c) の補文も現在時制であるが、(42b) のように発話時と同時の解釈がされるのではなく、「その時」で表される過去の状況として解釈される。

- (42) a. マコトはその時、首相の表情が不気味だと感じた。
 b. マコトは首相の表情が不気味だと今は感じている。
 c. マコトはその時、首相の表情が不気味だと感じている。

このことは、主節の動詞は「感じている」で現在時制であるが、現在時制の補文に対して過去の解釈を可能にする [past] が介在していることを示唆している。

5. 結論

「テイル」形は様々な意味に解釈されるが、これらはすべては、時を項とする述語である Asp_[IMPERFECT] あるいは、Asp_[PAST] のいずれかによる。前者により「テイル」形の〈継続〉あるいは〈結果状態〉の意味、後者により〈経験〉の意味がもたらされる。Asp_[IMPERFECT]、Asp_[PAST] はともに

下に示すように全ての非状態動詞からなる句を補部とすることができるが、異なる解釈は、[IMPERFECT] [PAST] の違いに加えて、補部述語の状況タイプの違い、素性の一致の条件に起因する。

	Asp _[IMPERFECT]	Asp _[PAST]
V _{動作} + テイル [+process, -definite]	〈継続〉	〈経験〉
V _{達成} + テイル [+process, +definite]	〈継続〉 〈結果状態〉	〈経験〉
V _{到達} + テイル [-process, +definite]	〈結果状態〉	〈経験〉

Asp_[IMPERFECT] は WITHIN の意味により [+process] の動詞の場合は〈継続〉と解釈されるが、[-process] の到達動詞の場合は、その [+definite] による終了限界点を結果の事態の開始点として Asp_[IMPERFECT] が分析し、〈結果状態〉の解釈が生じる。[+process, +definite] である達成動詞は、それぞれの性質により、〈継続〉と〈結果状態〉の多義性をもつことになる。Asp_[PAST] も状態述語以外全ての状況タイプとも共起が可能であるが、SitT を過去の特定の時に置くための時の副詞表現が共起することが必要で、Asp_[PAST] と [Spec AspP] の間の素性の一致として実現する。

参考文献

- Brugger, G. (1998). Event time properties. In A. Dimitriadis, L. Siegel, C. Sure-Clark, and A. Williams (eds.) *Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 4.2 (pp. 51-63). Penn Linguistics Club.

- Brugger, G., & d'Angelo, M. (1996). The Ambiguity of the Italian Present Perfect. In K. Zagana (ed.), *Grammatical Theory and Romance Languages*. (pp.13-34). Amsterdam: John Benjamins Publishing Co.
- Comrie, B. (1976). *Aspect*. Cambridge University Press.
- Demirdache, H., & Uribe-Etxebarria, M. (1997). The syntax of temporal relations: A uniform approach to tense and aspect. In E. Curtis, J. Lyle, & G. Webster (Ed.), *Proceedings of the Sixteenth West Coast Conference on Formal Linguistics* (pp.145-159). Stanford: CSLI Publications.
- Demirdache, H., & Uribe-Etxebarria, M. (2000). The primitives of temporal relations. In R. Martin, D. Michaels, & J. Uriagereka, *Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik* (pp. 157-186). Cambridge, Mass: MIT Press.
- Demirdache, H., & Uribe-Etxebarria, M. (2004). Syntax of Time Adverbs. In J. Guéron, & J. Lecarme, *The Syntax of Time* (pp. 143-179). Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Galton, A. (1984). *The Logic of Aspect: An Axiomatic Approach*. Clarendon Press. Oxford.
- Giorgi, A., & Pianesi, F. (1991). Towards a Syntax of Temporal Representation. *Probus*, 3 (2), 187-213.
- Girogi, A., & Pianesi, F. (1997). *Tense and Aspect: From Semantics to Morphosyntax*. Oxford University Press.
- Hoeksema, J. (1984). Categorical Morphology. Ph. D. Dissertation. University of Groningen.
- Hornstein, N. (1990). *As Time Goes By*. MIT Press.
- Iatridou, S. (2003). A little bit more on the English Perfect. In A. Alexiadou, M. Rathert, & A. von Stechow, *Perfect Explorations* (pp. 133-151). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Iatridou, S., Anagnostopoulou, E., & Pancheva, R. (2003). Observations about the form and meaning of the Perfect. In A. Alexiadou, M. Rathert, & A. von Stechow, *Perfect Explorations* (pp. 153-204). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Klein, W. (1994). *Time in Language*. London: Routledge.
- MacDonald, J. E. (2008). Domain of Aspectual Interpretation. *Linguistic Inquiry*, 39 (1), 128-146.
- Pancheva, R. (2003). The aspectual makeup of Perfect participles and the interpretations of the Perfect. In A. Alexiadou, M. Rathert, & A. von Stechow, *Perfect Explorations* (pp.277-306). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Reichenbach, H. (1947). *Elements of Symbolic Logic*. Berkeley: University of California Press.
- Smith, C. S. (1997). *The Parameter of Aspect*. 2nd edition. Berlin: Springer.
- Stowell, T. (1993). The syntax of Tense. Manuscript. UCLA.

- Stowell, T. (1995). The phrase structure of tense. In J. Rooryck & L. Zaring (eds.) *Phrase Structure and the Lexicon* (pp. 277-291). Dordrecht: Kluwer.
- Stowell, T. (2007). Sequence of perfect. In L. de Saussure, J. Moeschler, & G. Puskás, *Recent Advances in the Syntax and Semantics of Tense, Aspect and Modality* (pp. 123-146). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Thompson, E. (2006). The Structure of Bounded Events. *Linguistic Inquiry*, 37 (2), 211-228.
- Verkuyl, H. J. (1993). *A Theory of Aspectuality: The Interaction between Temporal and Atemporal Structure*. Cambridge University Press.
- Zagona, K. (1990). Times as temporal argument structure. Manuscript. University of Washington.
- 須藤義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論』 東京：ひつじ書房。
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタックスと意味』 Vol. II. 東京：くろしお出版。
- 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 東京：むぎ書房。
- 工藤真由美 (1987) 「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』 (p. 91)。むぎ書房。
- 工藤真由美 (1989) 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」言語学研究会 (編)、『ことばの科学』 Vol. 3. 53-118。
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間表現—』 東京：ひつじ書房。